

ユニット2（中央アジア地域班）研究会

2013年度 第1回 ユニット2（中央アジア地域班）研究会

■開催日時：2013年5月13日（月）15:00～17:00

■場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室

■報告者・報告題目：

報告1：三谷真澄（龍谷大学国際文化学部教授）

「ベルリンの仏教事情～漢文仏典写本の目録化を中心として～」

報告2：古泉圓順（四天王寺大学名誉教授）

「巷談『敦煌秘笈』」

■ファシリテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）

■コメンテーター：上山大峻（龍谷大学名誉教授）

■参加者：50人

【報告のポイント】

ドイツ隊がベルリンへ持ち帰った仏典写本群，および日本の羽田亨が所蔵していたとされる敦煌文書コレクションについて，2人の報告者からそれぞれ情報提供ならびに資料紹介がなされた。

【報告の概要】

三谷真澄氏は，「ベルリンの仏教事情～漢文仏典写本の目録化を中心として～」と題してベルリン市内の各機関に所蔵される中央アジア出土の仏教漢文資料について，自身の調査の成果を報告した。

1902年から1914年にかけて中央アジアに派遣されたドイツ・トルファン探検隊（German Turfan Expedition 以下，ドイツ隊）は，中央アジアから多くの典籍や考古資料を将来した。彼らが収集した資料は，言語・文字資料としての価値もさることながら，その多くに出土地が明記されている点で貴重である。大谷探検隊将来資料には出土地不明の資料も多いが，同時期に同地域で収集されたドイツ隊将来品との比較照合研究を行うことで，新たな視座の獲得が期待できる。そこで，三谷氏はベルリン・ブランデンブルク州立科学アカデミー（Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften）のトルファン研究所（Turfanforschung）を拠点に，ベルリン市内の国立図書館やアジア美術館に所蔵される漢字資料の通覧を企図し，ドイツ隊収集資料の現物調査を行った。具体的な成果としては，書写年代を再確認するための漢字資料の全点通覧を果たし，西域文化研究会が策定したトルファン写本の年代分期法に従って書写年代の再入力を行った。また，未同定写本の同定，相互に接合する断片の特定，イスタンブル，ヘルシンキなどの諸機関に所蔵される同類の写本断片の調査，

ならびに大谷探検隊収集資料との接合も視野に入れつつ、主として漢字写本断片を調査した。この調査研究によって、既刊3目録に新たに追加された1721点の新規同定写本断片に関しては、2015年までに目録第4巻として発刊される予定であり、写本研究上の大きな進展が図られつつあることを紹介した。

古泉圓順氏は「巷談『敦煌秘笈』」と題して、敦煌文書集成である『敦煌秘笈』について、自身の体験も織り交ぜながら、『敦煌秘笈』の資料的価値、およびその編集にかかわる事情について報告を行った。

『敦煌秘笈』は武田薬品工業五代目武田長兵衛和敬翁の敦煌文書コレクションである。研究のため京都帝国大学第12代総長羽田亨の下に寄託されてあったが、後に杏雨書屋に寄贈されて、羽田文庫として架蔵されている。この度これを書籍化し、目録冊1冊、影片冊9冊の全10冊で構成された大著である。長らく公開を切望されていた羽田文庫を、総長の令嗣羽田明の意向に従い、古泉氏がその目録作成にあたった。2009年3月以後、武田科学振興財団から順次刊行され、全体で約760点の資料を収載する。

こうした羽田文庫は、1936年に羅振玉の手を経て和敬翁に渡った李盛鐸旧蔵の敦煌写本432点がその中心となっており、それらが一般に『敦煌秘笈』の名で呼ばれている。ただし、今回刊行された資料群にはそれ以外の資料も含まれていることを、自身の調査をもとに報告した。さらに、資料的価値が指摘されていたにもかかわらず長く公開をなしえなかった事情について、当時の状況などを紹介しつつ詳細に解説した。関連して、かつて藤枝晃によって問題提起された李盛鐸印を有する資料の真贋問題についても、改めて論じる機会となった。

【議論の概要】

敦煌学の第一人者である上山大峻氏は、まず三谷氏のドイツ隊将来写本の目録作成について、そのめざましい成果を評価した。さらに、現在の成果が結実するに当たり、その糸口としてソ連統治下の東ベルリンと交渉し、日本との共同研究をとりつけた藤枝晃の功績を再評価した。自身もベルリンにおける同定調査に従事した上山氏は、かつての技術的制約下での同定作業について紹介すると共に、近年の技術力の進歩が、かえって資料を見る力の低下を招くのではと危惧しつつも、目を見張る実績に大きな期待を寄せた。つぎに古



泉氏に対しては、まず『敦煌秘笈』の持つ数奇な運命について理解できたことへ謝辞をおくった。また、上山氏自身も李盛鐸印を持つ写本が偽作である可能性を藤枝より示唆されていたことについて明かした。しかし、公刊された『敦煌秘笈』を実見したことにより、李盛鐸印が押されていても本物と考えられる資料が多数見受けられることを指摘し、

『敦煌秘笈』を、敦煌学者が新たに得た資料として、正當に評価していくべきであるとした。フロアからも、李盛鐸印資料について、印章ではなく写本そのものを改めて検討する時期に来ているとの意見や、李盛鐸印についての新たな研究が近年すすめられているとの情報提供がなされた。



2013 年度 第 2 回 ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

- 報告題目：アジア的視点から見た半跏思惟像
- 開催日時：2013 年 7 月 10 日（水）13:15～15:00
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1・2
- 報告者：宮治 昭（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）
- コメンテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- 参加者：28 人

【報告のポイント】

半跏思惟の姿勢で表される仏教美術を取り上げ、その変遷をインドから中国、日本まで多様な作例を示しつつ報告した。日本では広隆寺や中宮寺などの作例で知られる半跏思惟菩薩像だが、その尊格や姿勢が示す意味合いは時代や地域によって様々に変容する。それぞれの図像に含まれる意味を解き明かすことで、半跏思惟像が果たした役割を検討すると共に、当時の仏教信仰の実態の一端を明らかにした。

【報告の概要】

半跏思惟の形姿とは、一方の足を踏み下げて他方の足をその膝上にのせ、片方の手を頬につく、もしくは手指を額や顎に近づけ考えるポーズを指す。「思惟」とは、サンスクリット語の動詞語幹√cint, 名詞 cintā の漢訳語で、√cint には「考える」「思う」という意味があるが、そこには 2 つのニュアンスが内包される。すなわち、①「思考する」「熟考する」転じて「瞑想する」、②「心配する」「不安に思う」転じて「憂う」である。ところで、中国語の「思惟」は「深く考える」「熟考する」という意味で①の意味に近く、②の意味は含まれない。このことは、半跏思惟像の中国およびそれ以後における展開を考える際に重要なポイントとなる。

以上を踏まえ、半跏思惟像に関して、(1) 仏伝図中に表される場合、(2) 単独像で表される場合、(3) 弥勒信仰との関わり、(4) 観音信仰との関わりの 4 つの観点から考察を行った。

まず、(1) 仏伝場面中にみられる半跏思惟像としては「樹下観耕」を表す作例が挙げら

れる。ガンダーラで生まれた構図で、中国、日本にまでその伝統が確認できる。本説話は、悉達太子が農村に出かけたとき、農夫が畑を耕し、虫が鳥に食べられるあり様を見て生死の苦しみを感じ、樹下で深い瞑想に入る場面であり、「哀れみ」「深く考える」といったニュアンスを表すために半跏思惟の表現が選ばれたものと思われる。

次に、(2) ガンダーラで表される単独の半跏思惟像は基本的に観音菩薩を意図したものと考えられる。ガンダーラで確認される 20 例以上の単独半跏思惟菩薩像は、豪華なターバン冠飾をつけ、左手には蓮華をとることが多く、当地における観音菩薩の特徴に合致するからである。「樹下観耕」の悉達太子は鳥が虫をついばむのを見て「慈悲心を起して憐れんだ」(『過去現在因果経』)のだが、半跏思惟の太子の姿は「生きとし生ける者すべてに対し慈悲の眼をもって見る」(『法華経』「普門品」) 観音の姿に置きかえられたのであろう。

(3) 中国北魏時代には弥勒菩薩を交脚で表し、その両側に一對の半跏思惟像を配する図像が定型化する。「兜率天上の弥勒菩薩」と呼ばれる図像で、雲岡石窟の浮彫や単独の彫像も多い。これはガンダーラの一系統の図像をもとに中国で完成、流行したもので、半跏思惟像は交脚弥勒菩薩の脇侍として、左右対称性を重視した造形上の理由から 2 体で表され、弥勒菩薩の補佐役として表されたのだろう。北魏後期～北斉時代になると多くの単独の半跏思惟像が造像される。それらには「思惟像」の銘があるが、「弥勒」と刻んだ例はない。それゆえ、弥勒信仰と関係するが、弥勒菩薩自身とはみられない。こうした図像は、兜率天に再生して弥勒の弟子となろうと願う者は「兜率天の上妙の快樂を思惟すべき」であると記す『観弥勒菩薩上生兜率天経』の文言と関係し、「思惟像」は兜率天の素晴らしさを思惟する姿であり、信者（あるいは死者）を兜率天へ導いてくれる菩薩、つまり、弥勒と信者の媒介者として造形されたとみられる。こうした弥勒信仰と関わる半跏思惟像は韓国でも多く知られ、やがて日本にも影響を与える。

最後に (4) として、法隆寺金堂壁画の半跏思惟像は、大地から生じる蓮華を持つ図像で表されており、観音菩薩を表した可能性が高い。先述のとおり、インドやガンダーラでは半跏思惟の単独像は観音菩薩と結びついていたと考えられる。表現に違いは見られるものの、観音菩薩と結びついた半跏思惟像は、日本にも法隆寺金堂壁画、および如意輪観音像の姿へと継承されていく。

以上のように、半跏思惟像の魅力的な姿は、釈迦の成道前の悟りを求める悉達太子の姿から出発しながら、大乘仏教の菩薩思想を背景に、インドから東アジアにかけて弥勒信仰とも観音信仰とも深く結びつきながら、独特の発展を遂げたのである。

【議論の概要】

入澤崇氏は、「思惟」が仏教学の文脈ではさほど扱われてこなかったとし、美術史の面からのアプローチを高く評価した。また、「思惟」という言葉が禅観經典や唯識系の文献に現れることを紹介し、それら經典中にみえる「思惟正受」という言葉について、「正受」が三昧を表すことから「思惟」と「三昧」を並列させる点を注視していくべきであるとした。

半跏思惟という語は造形研究の中で定着した言葉だが、実際に思惟する際の姿勢として半跏という姿がガンダーラで広まり、それが造形化されるにいたった可能性を想定すべきではないか。また、禅観經典にみられる思惟の原語は不明だが、当時の人々が思惟を三昧の前段階として捉えていたのではないかと、との見解を示した。



2013 年度 第 3 回 ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

- 報告題目：来迎芸術の生成と変容
- 開催日時：2013 年 10 月 15 日(水)13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- ファシリテーター：三谷真澄（龍谷大学国際文化学部教授）
- コメンテーター：宮治 昭（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）
- 参加者：37 人

【報告のポイント】

来迎芸術を中心テーマに据え、その生成と変遷のあり方を中央アジアから日本までの多彩な資料を駆使して追跡した。来迎芸術の成立背景を検討するなかで、地域間交流や文化の変容・受容のあり方、僧侶たちの活動のあり方など、多岐にわたる問題提起を行った。

【報告の概要】

入澤崇氏は「来迎芸術の生成と変容」と題して、以下の通り報告を行った。

仏教の拡大、衰退について考える時、地域を区切って考察することは詳細な検討に際して必須のことではあるが、同時に、時として死角を作ってしまう場合もある。地域間交流によって新たに生じたものを見逃す場合もあるということだ。来迎芸術について、中央アジアを起点に東アジアへと考察の対象を広げていくことで、地域間交流によって変容・受容された仏教のあり方を検討するための一つのモデルケースとなるだろう。

大谷探検隊が最初に調査したクムトラからは、日本や中国と類似の表現をみせる来迎芸術が発見された。こうした浄土教美術の出現、展開には『観無量寿経』が大きな役割を果たしたと考えられる。その証拠に、『観無量寿経』をもとに作られたと考えられる美術は、中国唐代の美術に盛んに登場するようになる。

『観無量寿経』は釈迦が韋提希に 16 種類の観想法を教示する内容となっており、また九品往生についても説かれる。敦煌の壁画にはそうした内容を反映する画題が見られ、例えば第 431 窟の図像には上品上生から下品下生までの描写が確認できるほか、韋提希が観想している部分も描いている。こうした敦煌に見られるモチーフは西に伝播してクムトラの図像に影響を与えた痕跡があり、また、東に流れて當麻曼荼羅に影響を及ぼした。當麻曼荼羅は中央に大きく阿弥陀浄土の光景を描き、周辺に観経の物語を描く。こうした事例から、『観無量寿経』が西にも東にも大きな影響力を持っていたことがうかがえる。

ところで、来迎といえば阿弥陀をイメージするかとおもうが、来迎するのは阿弥陀だけではない。弥勒、釈迦といった尊格の来迎図も存在し、そうした尊格の来迎についてはいわゆる観経類とよばれる一群の經典群の中に典拠が求められる。では、何故阿弥陀来迎図が隆盛したのか。その背景には、『観無量寿経』の影響力と、それを広めた僧侶の存在がある。

親鸞がたてた七高僧の一人として知られる道綽（562-645）が、そのキーマンになる。大西磨希子は『安楽集』のなかの「相によりて」という文言に注目し、『観無量寿経』に基づく変相図を示している可能性を指摘した。道綽の著作である『安楽集』は『観無量寿経』に基づいて講じたものだ。また『続高僧伝』『道綽伝』にみえる「霊相」という表現も同様の意味を有する可能性がある。当時どのように『観無量寿経』の教説を表現していたかについては疑問も残るが、視覚的イメージを使って浄土教の伝道につとめたと提言する大西の意見は示唆的である。今まで、浄土図の流布は道綽の弟子であり、浄土図を多く描いたことで知られる善導（613-681）に帰せられていた。しかし、敦煌壁画の題記から 645 年にはこうした構図が定着していたことを考えると善導では若すぎる。道綽は生涯を山西省に過ごした人であり、敦煌壁画の指揮をとったとは考えにくい、彼が来迎を含めた浄土図の普及に重要な役割を果たしていたと考えた方が良さだろう。

最後に、『観無量寿経』に説く来迎を三次元で表現した例として迎講がある。これは、来迎橋、衣装や仮面、パフォーマンス、そして本尊の仏像といった、建築、芸能、美術など多岐にわたる文化の粋が凝縮した仏教行事といえる。

みてきたように、ひとつの經典が他地域に、そして、多くのジャンルに影響を与えた事例を今後改めて注目していく必要がある。

【議論の概要】

宮治昭氏は、入澤氏の発表に対し、スケールが大きく、多分に有益な問題提起のある報告であったと評価するとともに、仏教文化全体の中で中央アジアという地域をどうとらえるかについて、改めて考察していく必要があると入澤氏の論旨を支持した。また、地域間交流による文化衝突によって新たな展開が見られるという点について考察する視点を今後養っていく必要があると述べた。それまで存在しなかったものが、文化と文化が出会うことによって新たに生み出されるという現象は、文献からではなかなか追いかけていく。し

かし、そうした交流の様相は、美術というモノとしてその地に遺り、再び姿を現すことがある。仏教についても、教義や経典とあわせて仏教美術にも注目し、考察していくことによって、今後仏教の研究に新たな平野が拓かれるであろう、と今後の研究の展開に期待を寄せた。



2013 年度 第 4 回 ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

- 報告題目：モンゴル最古のチベット仏教寺院エルデニゾーと旧都カラコルム
～「仏教都市」エルデニゾーの淵源～
- 開催日時：2013 年 11 月 19 日(火)16:45～18:15
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：村岡 倫（龍谷大学文学部教授）
- ファシリテーター：三谷真澄（龍谷大学国際文化学部教授）
- コメンテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- 参加者：18 人

【報告のポイント】

かつて大谷探検隊の橘瑞超と野村栄三郎が訪れたエルデニゾー寺院は、モンゴル帝国時代の都・カラコルムの遺跡に隣接している。従来、エルデニゾー内でモンゴル帝国時代の碑や石材が見つかることから、この寺院は廃墟となったカラコルムの資材を運び込み、再利用して建立されたと考えられてきた。しかし、詳細な現地調査によって、モンゴル時代の資材はもともとエルデニゾー内に存在していた可能性が高まり、それによってエルデニゾー地域の機能の新たな側面が見いだされた。

【報告の概要】

村岡倫氏は自身の調査地であるエルデニゾー寺院について下記の通り報告を行った。

第二次大谷探検隊の橘瑞超と野村栄三郎は、モンゴルを経由して中央アジアに向かう際、エルデニゾーにも滞在している。彼らが訪れた 20 世紀初頭ごろ、エルデニゾーは盛んに活動していた時期にあたり、当時の様子は二人の調査記録から詳細に確認できる。

エルデニゾーは 16 世紀末に建立されたチベット仏教寺院であり、その北側にはモンゴル帝国時代の都・カラコルムの遺跡がある。その地は、古来より交通の要衝として栄えた場

所であり、8-9 世紀ごろから、中国本土から中央アジアへ向かうモンゴル高原経由のルートの中継地点として機能していた。モンゴル帝国が衰亡し、カラコルムが廃墟となった後、その役割はエルデニゾーに移ったものと推定できる。橘と野村が訪れた当時、エルデニゾーの北門（現在は西門と呼ぶ）を出たところに中国商人が多く滞在し、旅行者が必要とするものが一通りそろそろような露店が軒を連ねていたとする記事が、その傍証となるだろう。実際に橘と野村もここで旅支度をしたという。また、興味深いことに、二人はエルデニゾー内に宿舎を与えられたことが分かる。こうした記録から、当時のエルデニゾーは僧坊以外に旅行者を宿泊させるための施設が整えられていたことが分かり、エルデニゾーが単なる寺院としてのみ存在していたわけでないことを裏付ける。

ところで、エルデニゾーは隣接するカラコルムの石材を再利用して建立された寺院であり、エルデニゾー内にモンゴル帝国時代の碑文が数多く存在するのはそのためと考えられてきた。しかし、こうした碑文は、実は元々エルデニゾーの領域内に存在していたのではないだろうか。こうした考えは、従来カラコルムの宮殿である万安宮の跡とされてきた大型建築遺構が、近年、実は興元閣の跡であったということが明かにされたことによって導き出された。

興元閣とは、1256 年、第 4 代モンケ=カアンが建てた太閤寺を、1340 年代の改修の際にあわせて名称を改めたものである。それを記念して造られた「勅賜興元閣碑」と呼ばれる碑の台座である亀趺が、大型建築遺構の前に存在すること、また、そこから多数の仏像が出土することから、ここは万安宮ではなく、興元閣の跡地であると結論付けられた。代わって、カアンの宮殿である万安宮の場所がどこかということが問題になるが、多くの研究者はエルデニゾーの下に埋まっている可能性が高いと考えている。なお、エルデニゾー内でみつかると碑文には、儒教、仏教、イスラム教といった宗教施設の所在を示すものが含まれるが、こうした宗教施設も、エルデニゾーが現存する位置に元々建てられており、それが再利用された可能性が見いだせた。

従来、カラコルムは宗教都市としても機能していたと考えられてきたが、カラコルムが廃墟と化した 200 年後、依然として使用に耐えうる宮殿址や宗教施設の資材は当地に潤沢であったのではないか。エルデニゾーの地は交通の要衝としてのみならずカラコルムの宗教都市としての役割を、特に仏教に特化した都市として生まれ変わり、受け継いだのではなかったか。エルデニゾーの下にはモンゴル時代に遡る遺構の存在が期待でき、今後の更なる調査がまたれる。

【議論の概要】

入澤崇氏は、ユニット 2 のみ、すでに歴史となってしまった仏教を扱うことから現代社会への提言に際して困難も生じるが、仏教と異宗教との対話と融合の歴史が読み取れるという点が中央アジアで顕著にみられる傾向であり、今回の報告でもその様相が明らかにされたと村岡氏の報告を評価した。特に、エルデニゾーの寺域から儒教やイスラム教の施設の

存在を示す碑文が発見されていることが報告されたが、こうした事例は仏教と異宗教との交流を示すものであり、興味深い。イスラム教は仏教を駆逐するというイメージが現代を生きる我々には強いだろうが、こうした例は従来の見解に再考の余地を与えるとともに、仏教が持つ性格を考える上でも重要なポイントのひとつであろう。仏教はインドを起点とした教理的な宗教としてのイメージもある一方で、他の宗教に対する包容力を持ち合わせていたという指摘も近年盛んであり、後者の特性はとくに中央アジアの各地の遺構から見出せる。今回エルデニゾーで報告された、複合宗教施設ともいうべき事例が中央アジア全体にみられるものなのか、それともエルデニゾーの特色として考えるべきものなのか、今後のさらなる検証に期待したいと総括した。



2013 年度 第 5 回 ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

- 報告題目：多田等観請来チベット資料の基礎研究
～チベットの仏伝図『釈尊絵伝』とその源流～
- 開催日時：2013 年 12 月 19 日（木）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：能仁正顕（龍谷大学文学部教授）
- ファシリテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- コメンテーター：宮治 昭（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）
- 参加者：41 人

【報告のポイント】

花巻市博物館所蔵の『釈尊絵伝』は、ダライラマ 13 世の遺命により、大谷探検隊のひとり、多田等観に贈られたものである。花巻市博物館での現地調査を終えた能仁正顕氏によって、『釈尊絵伝』の調査報告ならびに画題や関連テキストに関する報告が行われた。

【報告の概要】

能仁氏は、「多田等観請来チベット資料の基礎研究～チベットの仏伝図『釈尊絵伝』とその源流～」と題して下記の通り報告を行った。

現・花巻市博物館所蔵の『釈尊絵伝』は、多田等観請来資料のひとつとして知られてい

る。多田等観は大谷探検隊の一員であり、1912 年に大谷光瑞の命をうけ、青木文教とともに交換留学生としてチベットに派遣された人物である。1923 年に彼がラサを去る際、ドライマ 13 世に『釈尊絵伝』を日本に持ち帰りたいと申し出たが、いったんは断られた。しかし、1937 年には、『釈尊絵伝』がドライマ 13 世の遺命によって日本の多田のもとへと贈られ、その後、戦火を避けて花巻に移される。1951 年に多田の実弟が住職を務める光徳寺境内に建てられた蔵脩館に収蔵されるも、1994 年、遺族によって花巻市に寄贈され、現在に至る。

本絵伝は、全 25 幅に 120 場面を描く大作であり、17 世紀ごろの成立とみられる。なお、本作は来春の龍谷ミュージアムで行われる展覧会で大きく取り上げる予定であり、今回の研究成果は来年度の特別展において広く公開される予定である。

『釈尊絵伝』は、当初、中央に本尊の仏画タンカを配し、左右にそれぞれ 12 幅の仏伝図が描かれたものであったようだ。現在は向かって左の 4 幅目が欠けているほか、11 幅目にも後世の描き直しを確認できる。現在は「本尊エクストラ」とよばれる釈尊を中心にした三世仏を描く幅によって欠を補うかたちで 25 幅とされる。繊細な筆致で全体的に色残りもよく、細部まで描きこまれた優品である。

この『釈尊絵伝』に関しては、既にいくつかの刊行物で取り上げられている。多田のもとに届いて約 6 年後には逸見梅栄らがいち早くその価値に気付き、「転法輪」の一部を紹介した。その後も龍谷大学西域文化研究所をはじめとして、各研究者や研究機関の注目を浴びてきたが、特に近年の奥山直司氏の研究によって、『釈尊絵伝』の図様と『ターラナータの仏伝』と『作画録』との関連が指摘されたことで研究は躍進した。さらに、図像に関しては、ナーランダー出土の 10 世紀ごろの作とみられる「仏伝八相図」との関連性が指摘されており、あわせて検討していくべきである。テキストの面では、『ターラナータの仏伝』の種本にあたるのが『根本説一切有部律』であり、こちらも引き続き考察していく必要があるだろう。

また、奥山氏の研究では絵伝の図像部分については詳細な研究が為されていたが、テキスト部分についてはいくらかの研究の余地があるようだ。『釈尊絵伝』を実見することにより、絵伝の各所に細かなチベット文字が確認された。既に剥落箇所も多く、読み取り可能な部分は限られるが、例えば本尊タンカの前机の部分には釈迦への帰依文が書かれていることが確認できた。「本尊タンカエクストラ」やそれ以外の部分にもこうした文字は随所にみられ、今後のさらなる調査が求められる。

以上、このたびの調査をふまえ、今後は『釈尊絵伝』やチベット仏伝図の特徴的な場면을抽出し、チベット仏教寺院内に描かれる壁画や、他地域の作例およびテキストとの比較検討を行う必要があるだろう。こうした作業を通じて『釈尊絵伝』の再評価がなされることにより、チベットの仏伝に関する新たな側面が明らかとなるであろう。

【議論の概要】

宮治昭氏は、『釈尊絵伝』に関する調査に基づき、図像とテキストの紹介が詳細に行われたとして、能仁氏の報告を評価した。また、『釈尊絵伝』の学術的価値の高さについて、とくに釈迦の生涯の物語における事跡が詳細かつ時系列で表わされる例は、本作を除いてアジアに類例を見ないものであると言及した。釈迦の生涯の物語を詳細な時系列で表現する作品としてはボロブドゥールの例が知られるものの、こちらの場合は『ラリタヴィスタラ』をその典拠としており、『ラリタヴィスタラ』が釈迦の前半生の物語を中心に説く構成の仏伝であることから、釈迦の晩年のエピソードまでを詳細に記す本作とは一線を画す。さらに、『釈尊絵伝』には今回紹介された以外にも興味深いモチーフが各所にちりばめられており、これらひとつひとつを丹念に検討することは今後のチベット美術研究をすすめる過程において重要な作業のひとつになる。一方で、関連テキストの研究や『釈尊絵伝』に書かれたチベット文字の解読、テキストと図像との照合作業など課題は山積するものの、今後のさらなる研究の進展が待ち遠しいと結んだ。



2013 年度 第 6 回 ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

- 報告題目：格魯派頭宗学院中經典教材的形成，伝承，使用
- 開催日時：2013 年 12 月 25 日（水）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：拉先加（中国蔵学研究中心助理研究員，沼田研究奨学金受給者）
- ファシリテーター：若原雄昭（龍谷大学文学部教授）
- コメンテーター：能仁正顕（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：23 人

【報告のポイント】

拉先加氏は、チベット寺院における学習体系について、各寺院で使用される「イクチャ（yig cha）」に着目し、その成立背景について検討した。また、現代のチベット仏教寺院においてイクチャがどのように使用されているのか、自身の調査に基づいて報告を行った。

【報告の概要】

拉先加氏は「格魯派頭宗学院中經典教材的形成，伝承，使用」と題して、以下の通り報告を行った。

今回報告の中心となる「イクチャ」とは、チベット仏教を学ぶための学習施設「タツァン (grwa tshang 学堂)」において使用される教科書を指すチベット語である。チベット仏教の僧侶達は、それぞれのタツァンで使用されるイクチャを基準にして学びを深めている。今回取り上げるゲルク（格魯）派はチベット仏教の中でも最も遅く成立した宗派であり、したがってイクチャの成立も最も遅い。

報告者による現地調査によって、ゲルク派のイクチャは三大寺のタツァンの成立と深い関わりを持つことが明らかとなった。ゲルク派では、1409年に甘丹寺が建てられたのを皮切りに、その後いくつかの中心的な寺院が建てられる。そうした大寺院を中心に、優秀な僧侶を養成する目的のもと、仏教を専門的に学ぶ学習施設が必要とされたことでタツァンが設置され、イクチャはそうしたタツァンの設立を背景に編纂された。タツァンにおいて学習する内容が多岐にわたるため、教科書のようなまとまった学習教材が求められたのである。

初期のイクチャは、ゲルク派の祖として著名なツォンカパの著作を中心として構成されていた。しかし、段々と各寺院の優秀な学僧達の著作も取り入れられるようになる。つまり、現在伝えられるイクチャは、各寺院における長い研鑽の歴史を経て成立しているのである。こうした成立背景が反映されてか、身分を証明する際にもイクチャが使われるなど、チベットにおいてイクチャが一定の権威を持つことも興味深い。

イクチャは現在も三大寺の学僧達の間で使用されているほか、三大寺だけでなく他の寺院でも使用されている。ゲルク派の発展の過程において、ラサだけでなく各地にゲルク派の寺院が建てられるようになったが、小さな寺院にタツァンが置かれる場合はほとんどない。したがってそうした寺院では、寺院の創立者が若いときに学んだタツァンにおいて使用されていたイクチャが使われる傾向にある。なお、タツァンを持たない小寺院では、座禅などの実践が中心となっている。

チベット仏教は、インド仏教の歴史的な変遷を度外視した上で当時得られる限りの仏教のすべてを摂取し、彼らなりに理解しようとした歴史がある。つまり、小乗、大乘、そして密教がほとんど一時にチベットへと流入したことを受け、そうした顕教と密教の教えを統合する形で仏教が理解され、受容されたのである。そうした、チベット仏教を体系化した立役者がツォンカパであり、彼の仏教理解はゲルク派のカリキュラムにも当然多大な影響を与えた。ゲルク派では般若・中観・因明・俱舍論・戒律の5つの教学がある。これらを学ぶための補助教材としてイクチャがあるわけだが、般若・中観の部分はツォンカパ自身の著作に依る部分が多い。因明・俱舍論・律のセクションに関しては、彼の弟子の講義録をまとめたかたちで編纂されていたようである。このように、ゲルク派のイクチャには成立段階の層が確認できるとともに、5つのセクションそれぞれで著作者に偏りが見られることが明らかになった。

【議論の概要】

拉氏の報告に対し、能仁正顕氏は、拉氏の詳細な調査による報告内容や関連資料の写真に多くの関心をかき立てられたと評価した。そのうえで、般若と中観が対応関係で発言されていたが、大乘の大きな流れの中では中観は唯識と対応されるのが通例である。しかし、ゲルク派の中で般若と中観が対になるのは何故か、との質問を投げかけた。これに対し拉氏は、般若と中観を対応させる主な原因として想定出来るのは、ゲルク派の学問体系がインドのシステムとは異なっていることに起因するのではないかと指摘した。そもそも、ツォンカパの仏教理解が中観派にウエイトをおいたものであるため、唯識がその学習体系の中に組み込まれていないことが背景にあるのではないかと回答した。



2013 年度 第 7 回 ユニット 2（中央アジア地域班）研究会

- 報告題目：文献考証が明らかにする仏教の本来の姿—盂蘭盆の本当の意味—
- 開催日時：2014 年 1 月 30 日（木）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：辛嶋静志（創価大学国際仏教学高等研究所教授）
- ファシリテーター：三谷真澄（龍谷大学国際文化学部教授）
- コメンテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- 参加者：53 人

【報告のポイント】

従来、『盂蘭盆経』は中国撰述経典とされ、「盂蘭盆」という言葉は「倒懸（逆さぶり）」の意と説明され、本経に関わる「お盆」の行事は日本の祖霊信仰に淵源を持つとも言われてきた。辛嶋静志氏は「お盆」が、アジア各地で今も行われる雨安居が終わる日（自恣の日）に僧侶へ食事等を布施する行事と同一であることを示し、『盂蘭盆経』に説かれるのがまさにその行事であることを明らかにした。また、「盂蘭」は自恣の日に僧侶に布施する「ご飯（梵語 *odana*）」の口語形 *olana* に由来するとし、訳語と文化の両面から『盂蘭盆経』がインドにルーツを持つ経典であることを明かした。

【報告の概要】

辛嶋静志氏は「文献考証が明らかにする仏教の本来の姿—盂蘭盆の本当の意味—」と題

して、下記の通り報告を行った。

竺法護（265?-311年に翻訳に従事）訳とされる『盂蘭盆經』は、従来、中国撰述の偽經とされてきた。その理由として、竺法護訳か疑わしいこと、「道眼」「孝順」といった非仏教的とされる表現が見られること、本經で餓鬼道に落ちて苦しむ母親を目連が助けようとする物語が説かれていることから、中国的な孝の精神の反映が看取出来るといった点が挙げられる。しかし、『盂蘭盆經』には法護が好んだ古風な訳語が見られ、鳩摩羅什（5世紀初め）より前の漢訳經典には「道眼」「孝順」といった表現が多数見受けられる。また、初期仏典の『シンガーラの教え』には両親にいかにか孝行すべきかが述べられており、インドやパキスタンで出土する仏教碑文にも、亡くなった父母の供養のために僧院や像などを寄進したと記す例は少なくない。以上から、むしろ『盂蘭盆經』の訳出は古く、内容は必ずしも中国的とはいえないということが分かる。

また南條文雄以来、「盂蘭盆」という言葉の解釈についても議論されてきた。玄奘三蔵の弟子・玄奘の『一切經音義』（650年）に「盂蘭盆はなまつた形で、正しくは烏藍婆拏であり、倒懸の意」とあるためだ。ところが、玄奘は梵語に堪能であったがインドの口語の知識は持っていなかった、という点は見逃されていた。

当初、仏典は高尚な梵語ではなく口語で伝承されていた。梵語への書き換えは3世紀頃から徐々に開始されたとみられ、それまでは口語によって説法や經典編纂がなされていたようだ。特にガンダーラ地方では、多くの大乘仏典がこの地方の口語で編纂されたとみられる。こうした事情は、近年ガンダーラ語の大乘仏典写本が次々と発見されることや、ガンダーラ語からの翻訳が判明した初期漢訳大乘仏典の存在からも裏付けられる。『盂蘭盆經』も、訳語をみる限り梵語ではなく口語から翻訳された經典のひとつと考えられよう。古い口語から翻訳された漢訳仏典の難語・音写語は、梵語の知識しか持たない玄奘には解釈できなかったものとみるべきで、「盂蘭盆」の解釈もそうした彼の誤解の一つであろう。經文には、釈尊が「現世の父母と過去七回の生存における父母を死後の苦しみから救済したいなら、百味の飲食物を盂蘭盆の中にいれ（以百味飲食安盂蘭盆中）、自恣の行事の際に僧侶たちへ施しなさい」と説いている。従来「盂蘭盆」を解釈した研究者は、往々にして原文から離れ単語だけに眼を向けていたが、もしそれが例えば「逆さづり」という意味であったならば文意が通らない。ここからわかるように、「盂蘭盆」とは明らかにある種の容器を指している。

ところで、釈尊の時代から、雨期の間の三ヶ月間、僧たちは托鉢をせず寺に籠るならわしがあり、それを雨安居という。この雨安居の最終日、すなわち古代インド暦の7月15日に、自恣という行事が行われてきた。この日には、それぞれの僧侶が衆僧の前で雨期の間に犯した罪を告白し、許しを乞う。また信徒たちは寺を訪れ、安居を終えた僧侶たちに布施をし、功德を積み、その功德を亡くなった縁者に回向する。中国とその影響を受けた東アジア一帯では、旧暦7月15日（2014年は8月10日）に、この行事をお盆（盂蘭盆）として行う。一方、東南アジアの国々でも古代インド暦の7月15日（2014年は10月8日）

に、同じ行事をワン・オークパンサー（雨安居を出る日）として賑やかに挙げる。日本の「お盆」と類似の行事はアジア各地で行われているのだが、東アジアでは中国の太陰暦に、東南アジアでは古代インドの暦に基づいて異なる時期に行われているため、「お盆」・「盂蘭盆」・「ワン・オークパンサー」が同じ起源をもつことに気付いた人はいなかった。『盂蘭盆経』で説かれている行事も、この自恣の日の行事に他ならない。そして自恣の日には、米飯、梵語やパーリ語でオダナ *odana* が、釈尊の時代から今日まで僧たちに施され続けている。「盂蘭」は、この *odana* の口語形 *olana* の音写である可能性が高い。すなわち「盂蘭」は「(お供えの) ご飯」、『盂蘭盆経』は『(お供えの) ご飯をいれた鉢の経』の意味になる。

以上から、『盂蘭盆経』はインド起源の行事をテーマとするものであり、竺法護もしくは彼と同時代の人物の手によってインド原典から漢訳された経典といえる。

【議論の概要】

入澤崇氏は、自身もかつて取り組んだ『盂蘭盆経』についての研究の進展を高く評価した。『盂蘭盆経』を読む限り、「盂蘭盆」が何かしらの器であることは明らかに関わらず、諸学者や僧侶たちは経文ではなく玄応の語義解釈ばかりに注意を払ってきた。自身は、そうした状況を整理し「盂蘭盆」が器であるとの見解は示せたものの、「盂蘭」の意味は明かせずに中国の少数民族が用いる竹細工、日本で言うところの盆棚的なものか、として筆をおいた。今回の報告で、「盂蘭」がガンダーラ語などのインドの口語で解決でき、本経が翻訳経であるという有益な見解が提示された。ただし、インド由来の仏教行事であるにもかかわらず「盂蘭」の用例が他の文献に見出せない点については注意すべきであり、今後用例が見つかることを期待する。また、東南アジアで行われている行事がお盆と起源を同じくするとの指摘は刺激的であった。同一の儀礼が同じように行われているながらその同質性に気付かれていないとの事例が示されたことは示唆的であり、今後十分注意して取り組むべき課題である。現在 BARC は地域を区切って研究を進めているが、それぞれが成果を持ち寄り、同じ仏教儀礼が地域ごとにどのように展開され、どういった異同があるのか比較検討し、総合的に研究していく体制が望まれる。今回の報告は新たな研究の道筋を我々に提示するものであった、と結んだ。

